

<論文>

## インタージェネレーション研究序説 —その方法論的アプローチ—

水野 宗一                      研究協力員  
草野(角尾) 篤子              信州大学教育学部生活科学講座

### An Introduction to Intergenerational Study A Methodological Approach

MIZUNO Soichi: Research worker, Faculty of Education, Shinshu University

KUSANO-TSUNOH Atsuko: Living Science, Faculty of Education, Shinshu University

“Why is the intergenerational exchange needed?” The answer is nothing other than the existence of gaps between the generations. Where are the gaps? How do we grasp and interpret them? I have tried to suggest how to solve the problems quoting from cases at home and abroad and from ancient and modern cases.

Today's composition of family is changing day by day. Therefore, I have tried to figure out the substance projected by the basic human desires of life and freedom.

【キーワード】 家族 ボランティア 親子の恣意的断絶 宗教の断絶 自然との断絶

#### 1. はじめに

最近インタージェネレーション (intergeneration) なる言葉が新聞で散見されるようになってきたが、その日本における歴史はそんなに古くはない。

さて、筆者は 1997 年 3 月公立高等学校を定年退職し、現在、全くフリーになった。インタージェネレーションなものを考えるとき筆者のバックグラウンドを少々説明すると、高等学校で英語を教えるかたわら毎年ボランティアで、主に米国、オーストラリアなどへ日本の高校生を引率していき、語学研修をさせたり、ホームステイや都市見学などの手伝いをして来た。もちろん筆者自身もホテルやモーテルなどに宿泊するのではなく、生徒達と同様にホームステイをしていた。そして、都市見学の際には、ニューヨーク、ワシントン、シドニー、メルボルン、等の大都市をツアーコンダクターと全く同じような仕事をして案内していた。こんな体験を通して、欧米や豪州やニュージーランド、特に英語圏の国々ではあるが、家族との触れ合いや、見聞して来たことが、この問題を考える上でとても大

切に思えてくる。振り返ってみると、筆者も永年ボランティアをやっていたことになる。特に、多感な 16~18 歳ぐらいの高校生を異文化の国で、同年齢の子供のいるホストファミリーや子供のいないホストファミリーのペアレントまたはペアレンツそれもちようど彼らの親達の年齢や彼らの祖父母にあたるような年齢差のペアレンツ(ホストファザー、ホストマザー)の家で異文化を通したインタージェネレーショナルな体験をさせる仕事をしてきたのである。

この小論はこれからのインタージェネレーショナル活動をしていく方向性への方法論的アプローチを提示しようとしたもので単なるエッセイや実践報告を企画したものではない。ゆえに、もちろん様々なコミュニティでどのような実践をして行けばいいのか、その是非を巡る判断材料を古今東西にわたって筆者の経験を踏まえて提供しようとした。それはまた、インタージェネレーショナルな社会現象が惹起している問題の本質に横たわる人間の本性や欲望にスポットをあて、えぐり出す切り口を与えて、そのフレームワークを体系的に構築する試みでもある。こうして筆者の意見を表現することは、世界各国の実践者及び研究仲間への示唆をあたえることになるであろうし、彼らもまた彼らなりの主体性をもって活動することにより、客観的に見ればこの分野の理論構築に貢献することになると思われる。

## 2. 問題提起のケーススタディー

次のものは筆者がこれまで各国で経験してきた多くの事例の一部であるが、インタージェネレーショナルでどう考えればよいのか事例研究のいろいろな示唆が与えられている。勿論日本の場合は生活文化様式、環境、宗教、価値観、などが違っており対処の仕方がおのずと異なるものである。

①ヒューストン、テキサスに滞在しているとき隣の家に 80 歳過ぎの老婆が 1 人で住んでいることに気が付いた。殆ど家の外には出ない。芝生は誰かが来て刈っているようだった。ある時ガレージのドアが開き大きな車がゆっくりと出てきた。見ると彼女が運転している。スーパーマーケットかモールでの買い物か教会へ行くのかもしれない。“アッ！車社会のアメリカだ。途中で、心臓発作でも起こったらどうなるだろう”。(注 1)(注 2)

②シドニーの近くオーストラリア第 2 の古都パラマタにある世界的に有名な聾学校を訪問したときのこと、身なりのきれいな中年過ぎの婦人が合唱の指導をしていた。耳の聞こえない子供にどうやって教えるのか、その技術的なことはさておき、そこの学校の先生ではなくボランティアできているとのこと。週一日のお手伝いという。

③メルボルンの近くのドルーインでの筆者のホストファミリーは 7 人家族、夫が長女 13 歳、長男 10 歳、二男 6 歳、の三人の子供を抱え育児に困っていた。妻は長女 15 歳、二女 13 歳の二人を抱えており、何かもの寂しい。いずれも single parent 同士の結婚、一気に大家族になってしまった。彼らの一方はみな生存している。このファミリーは地方紙でも取り上げられたが、こうなるまでには相当時間をかけて両家族が話し合い、その結果全員が

喜んで結ばれたものである。夫婦はもちろん義兄弟の間柄も本当の家族のようであらやましい限りであった。現在アメリカでは教会でこのように両家族同士が結ばれるのをメダリオン(medallion)といってそのような儀式を行う。夫が電車の中でふとした事から独身男性と知り合いになり毎年クリスマスに家に招待するようになった。欧米ではクリスマスは両親のもとへ集い拡大家族(extended family)になる。

④バーモントの田舎で、資産家の未亡人が乗馬クラブを作り、精神薄弱者などを招いて乗馬などをさせている。近くの高校生達がボランティアで手伝いにきていた。資産家の未亡人が物見遊山で遊び歩いているのと違い、地域社会やめぐまれない人々に奉仕している姿に感動した。

⑤デンバー、コロラドで夫失業中、妻の収入で生活している家庭が、自分達の子供2人のほかにベトナム孤児で盲目の少女を養子として養育している。その家庭が、更に日本からの女子中学生を受け入れてホストファミリーをやってくれた。後刻わかったことだが家庭の経済事情はあまり良くなく、日本の中学生は食事もろくに与えてもらえず困っていた。内情を知らずに、外見だけから見ると大変親切な人に見えるのである。

アメリカ社会には、ボランティアをしていないと何か肩身が狭いような考え方が存在している。しかし、このような事例からはインタージェネレーションでどのように考えればいいのかいろいろと示唆が与えられる。

⑥サンフランシスコで大勢のホームレスに食事を提供しているキリスト教の団体がある。

⑦サンフランシスコ大地震のときいち早くかけつけた日本のある大学の学生達、グループを作り救援活動をして大変地元の人々に感謝された。

⑧2000年1月早々、マイアミ、フロリダではキューバから漂流したゴンザレス君(6歳)の帰国に反対するデモが騒動に発展、負傷者が出た。政府間では何ら解決策もなく双方の国の宗教者が少年の祖母を連れて記者会見した。

### 3. 今なぜインタージェネレーションが必要か

今この問題を考えるとき、キーワードは“断絶”だと思う。断絶(disconnection)とは世代の断絶であって特に親(parents)と子ども(children)と祖父母(grandparents)と自分達(adult kids)の各世代間のふれあいが皆無か、あるいは少なく、その断絶から生じる種々様々な問題が、深刻な社会問題となって顕現しているからに外ならない。この断絶は狭くは家庭内、広くは社会の年代層、階層等に存在する。

日本の場合戦前から戦後の一時期まで、大家族制をとってきたが1960年頃から所得倍増政策が叫ばれた。その経済発展に支えられて、北米、オーストラリア、ニュージーランド等に較べては貧しいけれど住宅事情も改善された。核家族化が進み、世代間が同居しない傾向が著しくなった。各家庭では冷蔵庫、洗濯機、クーラー等の家電化が進み自家用車や電話、携帯電話、パソコン等の爆発的な普及につれ人々の生活もますます多忙になった。女性も家庭の雑事から解放され、社会進出が進むにつれ女性の高学歴化が進んできた。一

方共働きしないと食べていけないという事情もあり、働く男女の仕事内容も性による差別はなくなる傾向にある。女も男と同様に仕事からくるストレスが多くなり、それを癒すためや自らのシェイプアップのために競ってスイミングやエアロビクスやスポーツクラブやエステなどが盛況になって来た。反面、悪いの場であるべき家庭もみなが集う時間帯のずれで、家族の触れ合いが少なくなり、その絆が弱くなってきた。各家庭ではもともと弱い人に犠牲となって現れてくる。(家庭内の断絶)

大量の消費が経済発展を支える現代では、電力やガソリンに象徴されるように限りある地球資源の無駄遣いが多くなり、その枯渇が叫ばれて久しいが、大気汚染や、自然環境の破壊、ダイオキシンや遺伝子組替食品など一般大衆が目に見えないところで進んでいる脅威におびえている。また原子力発電が安全であるとは言い切れずチェルノブイリ級の事故が一度おきると日本列島は全部汚染されてしまう。このように人々は毎日毎日不安に晒され、このようなことが知らず知らずのうちに人の健康や精神を蝕む。(自然との断絶)

人はどこに住もうが何をしようが、何を信じようがすべて憲法で保障されており自由であり、又現代社会は学問の選択、職業の選択から始まってあらゆる面で選択肢が多すぎ、そして複雑な仕組みになっておりそれに対して人々は自信をなくし不安にかられ孤独に陥る。様々な価値観が存在し、それに翻弄され悩んでいる。そのような時カルトやカルトまがいの宗教に救いを求めて入信してしまい、あるものは、無差別殺人でサリンを撒いたり、反社会的な行動を取ったり、財産をすっかりまき上げられたり、人殺しをしたりする。世間一般から断絶して孤立集団を作って生活している悩める人々(本人達は法悦の境にひたっている)をインタージェネレーショナルは救ってあげられるであろうか?(一般社会からの断絶)

少子化の問題も深刻である。国立社会保障人口問題研究所の推計によればもう 80 年もすれば日本人口は半減し、1000 年後にはたった 150 人になってしまう。そうなれば日本文化はなくなってしまう。勿論そうなれば日本の国土から人口が消えてしまうかということそうではない。何故ならば人口の多いアジア、アフリカ地域から人口の流入が始まるであろうし、それが自然の理というものだ。

しかしこの時は彼等は自国の文化を持ち込んで来るのでインタージェネレーショナルも一層難しい側面を持ってくるのも仕方がない。(文化の断絶)

ここで少子化について阿藤誠さんの説をみてみよう。

『少子化は家族観の問題です。女性の社会進出や高学歴化などに変化は見えても、家族観の変化は遅い。これが、少子化の重要な要因といえます。

例えば、パラサイトシングルはカップルより親子を中心とする日本的家族観の表れ。「家族は国家や企業に奉仕しそれを支える」という明治以降に作られた禁欲的な文化もなかなか変わらない。今後、豊かで自由な社会にどう軟着陸していくのか。

また、日本は婚外子を受け入れないため、国際的に見て極端に同せいや婚外子が少ないと言われます。しかし、これは若者自身が親元から自立しようとする意識が弱いか

らでもあります。

1970年代に米国に行ったとき、家事を手伝う男性にショックを受けました。母が台所にいる間、父が新聞を読んでいるような家庭で育ちましたから。

性別役割を是正しても、出生率は簡単に向上しないかもしれません。でも、イタリアやドイツなど少子化が進んでいる国の共通点は男女の役割を過剰に区別する点なのです。

現在、専業主婦志向が強まっていると言われます。しかし、これは長続きしないでしょう。これから、若い労働力が激減する時代がくるからです。』(注3)

今年が国際高齢者年(international year of older persons)である。高齢化が老害化になりかねない問題が将来発生するかも知れない。今、介護がすべての人の関心事である。老人が多くて生産年齢の人口が少なくなれば当然社会は活力を失い、その国は滅びに向かって進んでいく。老人が多くなれば介護が深刻な問題になることは明らかだ。若い人々や中高年の人々が外国から入って来るだろう。今現在日本に住む外国人は1%強である。また宗教もキリスト教が約1%である。しかし、だんだんその比率が大きくなり、イスラム教徒も増えてくるだろう。文化が多様になるにつれそれぞれの文化の源となる宗教間の摩擦も多激しくなるだろう。(宗教の断絶)

家庭では長幼の序が薄れ道徳を教えない、親が子供に孝行を期待しない傾向が最近とみに強い。果たしてそれで良いのであろうか。孝行とは自然界になく人間だけに存在する言葉である。中国の孔子の教えとして昔から東洋では親を大切にし、その恩に報いるのが孝行とされ伝統的な美風とされてきた。世代間交流(Intergenerational)ではこの問題をどう考えればよいのであろうか。人間は万物の霊長といわれ自然界とは違った生き方をしてきた。自然界では弱肉強食つまり自然淘汰であり、人間社会は年寄りをいたわり弱い人々を助けてあげようというのが古今東西を問わず定説であろう。ところで、アメリカで始まり我国でも当たり前になった核家族は親が子供達と同居を好まない。将来子供の世話にもなりたくないということが大きな原因である。一方子供のほうから見ると親の世話にならず早く独立したいという意志が働いているのも事実であろう。(家庭内親子の恣意的断絶)

ここで核家族に異議を唱える地球物理学者の竹内均氏の意見を見てみよう。

『“三世代同居のすすめ” 田舎で育った私には、三世代同居はいわば当然のことであった。しかし、東京という大都会へ出てきてみると、特に終戦後には、三世代同居が異例であって、核家族が普通のことであった。成長した子供達が親を離れて別居する。夫婦共かせぎの場合には、生まれた子供を託児所に預けて二人が働きに出る。三世代同居のよさを見慣れてきた私には、これはゆゆしい問題のように思われた。

託児所に預けられた子供達は、親や祖父母の愛なしに育つ。こういう子供が良い子供になるとはとても思われない。その一方で、新夫婦が狭い家に住み、また老夫婦は寂しい老後を送る。なんともばかげた事である。三世代が同居すれば、ごく単純に考えても、家の広さは二倍になる。老夫婦は孫の面倒を見ることで老後の楽しみを得、新夫婦が共

稼ぎをする場合にも、彼等は老夫婦に孫を委ね、安心して働きに出ることができる。このような数々の利点を持った三世同居を、なぜ人々は捨てるのか。それは若い世代や年老いた世代のわがままからきた愚行である、と私は考えた。そして、自分だけはこういう愚行を犯すまいと決意し、またその決意を実行した。その結果もまためでたしめでたしであった。

二本の足をもった椅子には座れないけれども、三本足になれば椅子が安定化する。これと同様に、家には三世同居すべきものである。このようにして初めて；それぞれの国の文化のよい伝統が、世代から世代へと伝えられる。それはわれわれ日本人が長い間実行してきたことであり、またすぐれた文化の伝統をもったユダヤ人が実行してきたことでもある。二千年あまりものあいだ母国をもたなかったにもかかわらず、ユダヤ人がその文化的伝統を失うことがなかったのは、全くこの三世同居のためである。と私は考えている。』(注4)

さて、何と言っても世代間の交流を促進して、世代間が助け合い、話し合い、触れ合いその断絶を無くそうという動きはまことに老若双方にとって、プラス面のみを見ているのである。しかし、日本には古来から家庭内や地域社会での老若のコミュニケーションの結果か長老の知恵か、姥捨て(おばすて)山伝説のような社会現象が日本の一部に行われていた。若者(生産人口)の手足纏(労働力を削ぐ)からか、口減らし(食糧難)からか老女を人里はなれた山奥に捨て去り、人為的にリストラをはかっていた。一方全く違った現象がアメリカのマイアミで起きている。マイアミはフロリダ半島の最南端、避寒地として有名であるが故に、老人が自然と多く集まり老人天国のようである。いたる所老人で、その比率が高く、老人パワーが市の予算面で、若者の利害と対立している。この問題は介護が充実してくる先進国では、やがて起こり得る可能性が大であろう。(世代間の利害の面での対立)(注5)

#### 4 インタージェネレーションのフレームワーク

いろいろ考察して来たが、今まで見てきた断絶がどのように位置付けられるか、そのフレームワークを試作してみた。

次の3つになる。①垂直的断絶、②水平的断絶、③三次元の断絶である。まず①垂直的断絶(vertical disconnection)…世代間(家庭内、一般社会)での断絶時系列でとらえる。次に②水平的断絶(horizontal disconnection)これは人種・民族・国家・地域・政治・経済・宗教・文化・あるいは国・公共団体と国民又は地域住民との間にある断絶。これらは①と密接に関連しているのである。最近の新聞ニュースから拾ってみると次のような問題がある。東ティモール・チェチェン・コソボ自治州・イラク・ゴラン高原・スリランカ・ベルファスト・カシミール・クーシュ・マルク等これらみな②に属し宗教的対立が非常に根深く深刻である。インタージェネレーションな問題を考えるとき②を抜きにしてはよりよい解決策が見いだせなくなって来ている。さて最後にもう一つ重要な断絶は自然との

断絶である。これを三次元の断絶と呼んでみることにする(three dimensional disconnection)。温暖化、遺伝子組み換え、少子化、環境破壊、原子力、微粒子等等、枚挙に暇がない。これらは①②の平面と密接に結びついて立体をなしインタージェネレーション(Intergenerational)なものと考えるとき断絶のフレームワークとなる。今日地球が狭くなってきており、英語の格言で Think globally, act locally という言葉がある。さてこのことがいみじくも以下に紹介する 1999 年のケベックの世代間連帯に関するケベック宣言第 8 条にも表れている。

「第 8 条：老いも若きも社会の発展に貢献する権利と義務がありこの目標に向かって双方は社会で積極的役割を演じると同様に自分自身の運命を追求するために必要な財源を与えられなければならない。(原文 Young people and older persons have the right and the duty to contribute to society's development. Towards this end, they must be provided with the resources they need to pursue their own destinies as well as to play an active role in society.)」

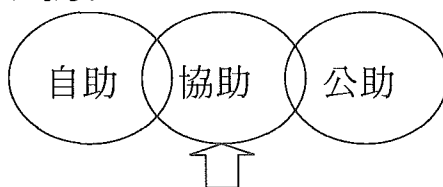
## 5. おわりに

自然界は弱肉強食、つまり自然淘汰で世の中が推移して来た。人間も自然界の中にあつては弱肉強食で「智」をもって自然界を支配してきた。しかし人間社会の中にあつては民族・思想・宗教・階級などで大量の殺戮が繰り返された。反面、人道的・道徳的な要請から年寄りをいたわり弱いものを助けるという風習も古来より連綿と続いてきた社会規範である。

さて、人間も自然界の一員である限り自然との共存なくしては人間(人類)自身も存在し得ない。自然とのバランスを考え、自然環境保全に勤めないと将来必ず取り返しのつかないことになる。インタージェネレーションなものと考えるときいつも「自然に対するやさしさ」が根底になければいけない。

現代社会は科学、情報技術の発達により、ものの見方・考え方・価値観が変わり、多様化して今までの社会規範では問題に対して適応、収拾されなくなっている。人々が予想し得なかったことが惹起したりする。例えば、今度の阪神淡路大地震のとき公助(国や地方公共体等の援助)では対応しきれないことがはっきりした。ボランティア団体の協助(共助)が非常にクローズアップしその活躍が目ざましかった。もちろんスマイルズではないが(自助論で有名)自助は基本である。しかし今まで見てきたようないろいろな断絶があり、その断絶がある以上それを埋め合わせるボランティアの力が必要と思われるのである。

以上を図に表すとこのようになる。



## インタージェネレーション

インタージェネレーションが NGO として日ごろの活動が期待される場所である。また、自助と公助のはざままで援助の手を差し伸べることが意外に多いと思われるのである。

そして、高齢者をネガティブにだけ捉えるのではなく、もっとポジティブに捉え、彼等の持つ「智」を無尽蔵の資源として活用しなければならない時期にきていると思うのである。(注6)

### 【注と参考文献】

(注 1)アメリカではカウンティ(郡)や市によっては、パトロールをして、違法駐車や芝生が手入れされないでぼうぼうとしている家を警告して歩いている係官(警官ではない)がいる。

(注 2)核家族(nuclear family)父母と未婚の子供からなる家族

(注 3)オトコのミカタ欄 専業主婦志向続かない 国立社会保障・人口問題研究所長 朝日新聞 2000年6月16日付

(注 4)竹内均著〔終身〕のすすめ 昭和56年講談社

(注 5)姥捨山伝説…大和物語、今昔物語

檀山節考…深沢七郎著 昭和32年

(注 6)Self-Help 1859, by Samuel Smiles, John Murray, London

(2000年3月31日 受付)

(2000年7月21日 受理)